

ワイナ・ピチュ (2430 m)

(マチュ・ピチュ遺跡)

ペルー

黒田 洋一郎

南米でも日本人も良く行く屈指の観光地、マチュ・ピチュ遺跡。その南端に聳える ワイナ・ピチュは、遺跡を前景に三角形に鋭く尖った岩壁が目立つ印象的な山だ。マチュ・ピチュ遺跡の観光写真では必ずと言っていいほど遺跡の背景として写り、ワイナ・ピチュの姿は世界中の人々に目に触れ易い。南米の山としては、世界中に一番知られているといえる。ヒマラヤなどと違い、昔からの頂上への細いが急峻なしっかりした道もついており、体力があれば誰でも登れる。



写真1 マチュ・ピチュ遺跡と背景の三角に尖ったワイナ・ピチュ 遺跡の中央辺り最高部にある小高い建築物の頂上には石柱がある。



ワイナ・ピチュのチョウ

(Thecla 上科)

Penaincisalia loxurince

©Alan Cassidy

鋭く高くそそり立ったワイナ・ピチュの頂に、はるか下の熱帯林の樹冠から吹き上げられたチョウの中に、大型の珍しいシジミチョウもいた。Thecla は中南米の熱帯に多く、日本の雑木林にいるゼフィルスに近いチョウで、とくに翅表が紫色や青藍色など様々に輝き美しい。ゼフィルスの名は、ギリシャ神話の Zephyros 「西風の神」に由来、かなり嫉妬深い男神という。

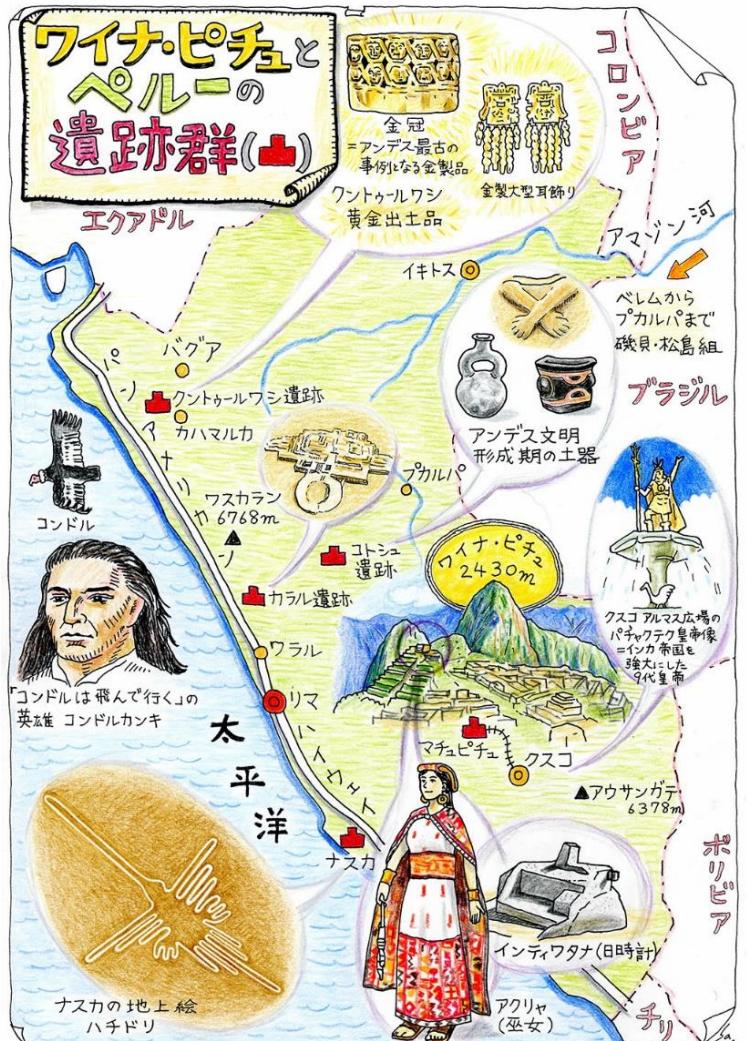
実はより有名なマチュ・ピチュ遺跡の方も元々は山の名で、ケチュア語「Machu Picchu (老いた峰)」を地名化したもの。ピチュは、コカの葉を口一杯にして咬む習慣のあるケチュア人の頬ペタが膨らんだ形で、岩が出た峰の意味と言う。遺跡の一方の背後にあるマチュ・ピチュの頂上は、やや丸いのだが、眺めたり写真を撮る人も少ない。遺跡側の登山道沿いや頂上には目立った遺跡もなく、わざわざ登る必要もない。一方、遺跡の背後に見える尖った山らしい岩山がワイナ・ピチュ「Huayna Picchu (若い峰)」で、インカ時代には山頂に神官と侍女たちが住み、毎朝日の出前にマチュ・ピチュ遺跡に行き、その日の開始を告げる。またワイナ・ピチュ山腹には、マチュ・ピチュ遺跡の「太陽の神殿」に対する「月の神殿」が、やや離れた所にある。村や鉄道の駅のある谷底からはマチュ・ピチュ遺跡は全く見えず、その存在は確認できない。そのためかこの遺跡は、「空中都市」「空中の楼閣」などと称される。

1911年に米探検家のハイラム・ビンガムは、この付近で古いインカ時代の道路を探検していた時、偶然高い山の上に大きな遺跡を“発見”した。彼がそこに住んでいた一人のケチュア人に「これは何?」と訊いたところ、遺跡の存在を当然無視していた彼は、山の名前を訊かれたと思ったので「マチュ・ピチュ」と答えた。このケチュア人は税金逃れの目的で、谷沿いでなく非常に不便な高

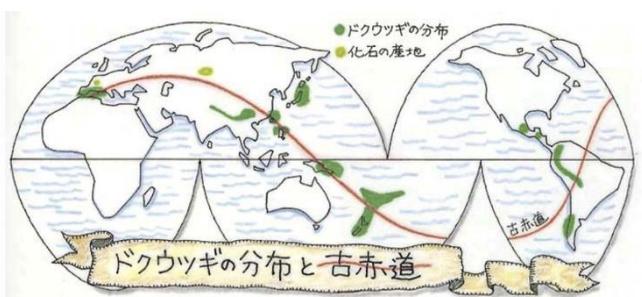
い尾根上だが、昔からの段々畑があるのを幸い、農耕していたのだ。その後ビンガムは計3回の発掘を行い、マチュ・ピチュ遺跡についての書籍や論文を発表し、『失われたインカの都市』はベスト・セラーになった。また1930年の彼の著書『マチュ・ピチュ：インカの要塞』は、廃墟の写真や地図も加えられ、説得力のある報告となった。

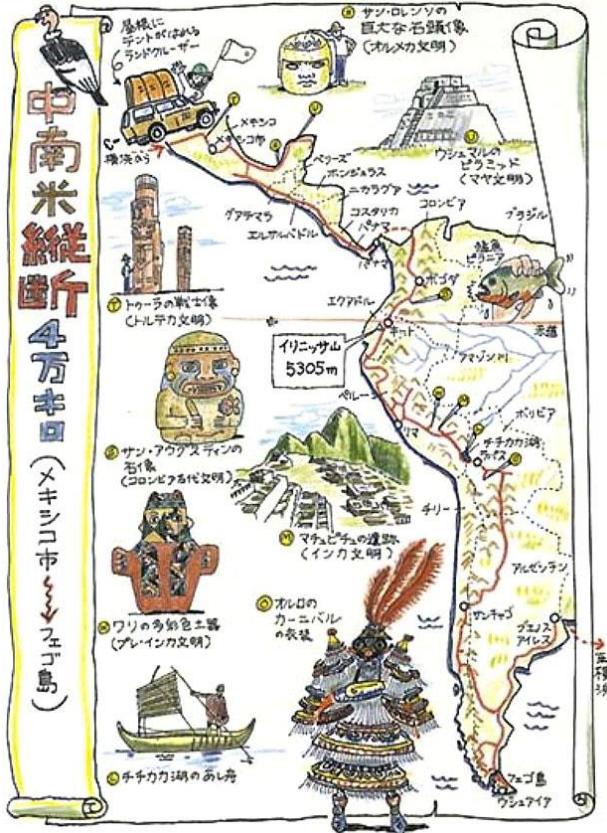
しかし彼の死後、2008年になって19世紀に作られた地図が見付かった。それには、マチュ・ピチュ近辺らしい土地が描かれており、ビンガムに先立つこと半世紀近く前に、誰かがマチュ・ピチュに行っていたのだ。彼がマチュ・ピチュで発掘した遺物も、今はイエール大にあるが、不法に米国に持ち出されたとペルーから返還を求められ、「墓泥棒」とまで言われ、第一発見者の名誉も失われた¹⁾。最近では、ビンガムがインティワタナ（太陽をつなぎとめるもの）と名付け日時計だと考えていた遺跡の最高部にある石柱も、現在では「後ろにあるワイナ・ピチュの岩山を象っているもので、マチュ・ピチュの守り神だった」という異説もでている。

私がマチュ・ピチュ遺跡へ行き、ワイナ・ピチュに登ったのは、半世紀ほど前の1969年。東大から正式派遣された中南米縦断調査隊（メキシコ市から南米南端のウシュアイアまで）の旅の途中だった（次頁地図参照）。この遠征は学術調査探検部の学生、大学院生計7人で行われた。大学探検部史としては、現在でも40以上もある日本の大学探検部が過去にやった海外遠征では最大の規模で、中南米約4万kmをトヨタ・ランドクルーザーで走り抜き、6ヶ月以上かかった。遠征目的は、「生物の進化と分布の因子、古赤道説²⁾が植物だけでなく、昆虫でも成り立つか」を調べる、これまでに大学探検部には無かった仮説立証型の、学生たちだけによる学術調査探検だった。このため、南米のなるべく多様な環境



で沢山の昆虫を採るために、道さえあればアンデス山脈を越えアマゾン上流を訪れたので、時間もかかり、悪路、難路も多かった。またアンデス山脈を何回も越え、アマゾンに降りたので、高いアンデスの名山など山々の脇や近くも通ったが、私た





ちには山好きも多かったものの、いわゆる登山はしなかった³⁾（山岳会の人に誘われたイリニッサは例外）。

実はクスコを通過することは最初からの予定で、それより 1000m ほど低く アマゾンにも近い マチュ・ピチュ遺跡にも行って見ることになっていた。マチュ・ピチュの麓、鉄道の駅のあるアグア・カリエンテスは文字通り温泉があり、今マチュ・ピチュ村はもう町と言えるほどで、ホテルなどが沢山建ち、世界的観光地として大きくなった。標高は 2049m、もうアンデスの外れ、アマゾン上流のウヤカリ川沿いで、熱帯の雰囲気である。

実際にマチュ・ピチュ頂上に登ってみると、昆虫調査の立場から言えば、私たちの判断は正しかったと言える。何と、この頂上は朝から昼に約 1000m 下の麓の谷から吹き上げる上昇気流があり、ジャングルの高い梢付近、樹冠にしかいない蝶など、昆虫の希少種が風で吹き上げられ、付近の岩や草の上に止まっているのだ⁴⁾。標高が 1000m も

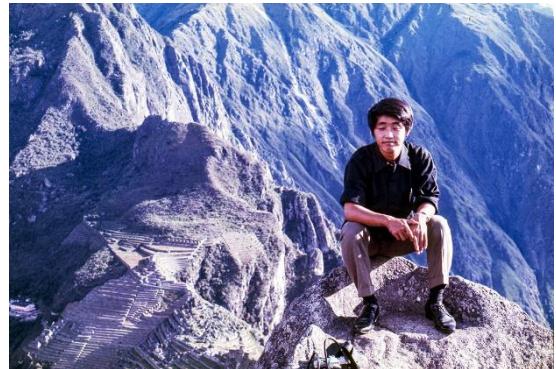


写真2 ワイナ・ピチュ頂上の朝比奈隊員 マチュ・ピチュの山を背景に。遺跡は下に隠れている（1969年）。

違うので、気温が低下して良く飛べなくなった昆虫たちは簡単に採集できた。翅の表は青藍色に輝く大型シジミチョウ、Thecla の仲間など、普通の場所では採れないはずの珍蝶もいて、皆で喜んだことを覚えている。マチュ・ピチュには、頂上付近に神官の住居遺跡がある。ここが天に一番近いと思われたためか、祈りや儀式が行われていたらしい。下の谷も広く良く眺められるので、下流から攻めてくる敵部族の、見張り台にもなっていたであろう。

マチュ・ピチュは9代インカ皇帝パチャクティの時代の 1440 年頃から建設され、人々の生活が続いている。遺跡がインカにとって、実は何のための都市だったかは、まだ良く分かっていない。しかし、夏を涼しいクスコ（3399m）で過ごした皇帝の別荘、標高を下げた温暖地に造られたマチュ・ピチュ（2400m）には皇帝避寒用の離宮説があった。しかし現在有力なのは、太陽の動きを知る絶好の場所であり、太陽を崇拝し、皇帝は太陽神の子として崇められ、暦を司っていたことから、インカ人が崇めていた太陽を観測するための建物群という推測である。実際に、遺跡に沢山ある石の建物の中でも有名な、「太陽の神殿」は東側の壁が 2 つ作られていて、左の窓から日が差し込む時は冬至、右の窓から日が差し込む時は夏至と、区別できる。また、処女たちを生贊にした？といわれた台座上の遺構も、やはり太陽を観測するためのものである。「インティワタナ（太陽をつな

ぐもの)」という意味の石柱は、一種の日時計だったと考えられている。なお遺跡で発見された遺骨は殆どが女性で、太陽神に仕えるアクリヤ（巫女）だと言われていたが、最近の研究では、遺骨は男女同数、普通の家族のものだった。皇帝の権威を保つためにも、農耕に役立つ暦と、それを決める天文学が発達していたようだ。

夏至／冬至と言えば、世界遺産の始まりだった「アプシンベル宮殿」の移設は大事業だったが、ナイル河増水による全体の水没が避けられただけでなく、冬至の太陽光が神殿の奥まで届く設計も忠実に再現された。北欧などでも、冬至や夏至の日は重要視され、昔からの伝統的な祭り、夏至祭があり、この種のヒトの風習は、昔から世界共通らしい。またインカの遺跡では近頃、地形がマチュ・ピチュに似たやや小さな遺跡が近くで幾つも見付かっており、マチュ・ピチュでも、アマゾン低地の周辺敵部族に睨みを効かす、帝国の班図維持のための、防衛目的もあったのかも知れない。マチュ・ピチュの住人の由来も分かって来た。一部の頭蓋骨には人為的に頭を長くしたものがあり、ペルー南部のクスコの精緻な石壁を造った高度な石材技術者が、マチュ・ピチュに移り住んだ証拠と言われる。



最後（13代）のインカ皇帝であるアタワルパ
スペインの荒くれ者ビサロに亡ぼされた（名目上の
最後の皇帝はトゥパク・アマル）。

身代金として大量の黄金を差し出し騙されたアタワルパ皇帝を、スペイン人侵略者で残酷なビサロらが処刑し、インカ帝国が滅亡した。その後も次代皇帝マンコ・インカは反抗を試み、一撃はクスコを回復したが、スペイン人たちに奪還された。彼はビルカバンバに後退し、新しい「ビルカバンバのインカ帝国」を更に36年間統治し、スペイン人たちへの襲撃や反乱の扇動を続けたが、伝染病の蔓延が、インカに壊滅的な打撃を与えた。いずれにしろインカ文明には、キープ（縄の結び目）を使った記録法はあったが、文字が無いために昔のことは想像するしかない。ワイナ・ピチュも新しい発掘調査が行われており、新しい発見が期待されている。

インカ帝国滅亡の約200年後、もう一つのインカの反乱がまた起こった。反乱の指導者は、インカ皇帝の末裔：トゥパク・アマル2世と自称した、ホセ・ガブリエル・コンドルカンキである。彼は本当はインカ皇帝の子孫でないが、重要なことは、彼が先住民を組織し、後の南米諸国の独立につながる、スペインの植民地体制を揺るがす、大反乱を起こしたことである。コンドルカンキは1741年、クスコ近くの裕福なクラカ（村長）の一族に生まれ、純粋の先住民ではなく、メスティソであった。1780年、彼は、スペイン王の命名日を祝う宴に招かれていた。宴から帰ったスペイン代官の前に、先に姿を消していたコンドルカンキが先住民の男達を率いて立ちはだかって、アンデスを揺るがす反乱が始まった。

『私の世界百名山』HPの始まりのテーマ・メロディ「コンドルは飛んで行く（El condor pasa）」は、アンデスに舞う大きなコンドルの勇姿を描いたと言うような単純な曲ではない。日本では余り知られていないが、元々の曲は、植民地時代のペルーでインカ農民反乱に立ち上がった英雄：コンドルカンキの苦しい戦いを描いた サルスエラ（ペルー風オペラ）の序曲だった。このフォークロア的メロディに後に米国のサイモン&ガーファンクルが英語の歌詞を付け、ヴェトナム反戦の反体制ムードに乗り有名になり、森山良子など世界中の多くの歌手に再フォローされたものである。

反体制といえば、あのチェ・ゲバラも、医学生時代にアルゼンチンからペルーなどアンデス山脈沿いを北上するモーターバイクによる旅を行っている⁵⁾。彼も訪れたマチュ・ピチュ遺跡について、「アメリカ大陸で、最も強大であったインカ帝国の過去の文明の純粋な表出を、目の前に確認できるもの」として評価している。ゲバラがボリビアで殺されたのは1967年、翌年私たちもアンデス麓のサンタ・クルスに行ったため、ゲバラの闘いの跡を通った。ゲリラが唯一襲撃に成功した町サマイパタの様子や付近での出来事は、東京大学ラテンアメリカ縦断調査隊報告書『中南米の光と影』実業の日本社（1971）などを参照。

マチュ・ピチュ村と日本の関りは、実は元々深かった。この村を開発し、初代マチュ・ピチュ村長にまでなったのは、初期のペルー日系移民の野内与吉（1917-1968）だった。クスコからマチュ・ピチュへの鉄道建設にも活躍し、アグア・カリエンテス近くに定住した。ビンガムの遺跡発見直後には温泉も掘りあて、観光客用に初めての3階建てのホテル・ノウチも建設し、一階は郵便局や交番として、二階は裁判所や村長室として使用された。電気も引き村民の尊敬を集め、正式に村になった1941年、村長となった。彼は私たちが訪れた年に死んだが、野内村長のことは、その頃の私たちは全く知らなかった。なお野内の出身地：

福島県安達郡玉井村（現大玉村）は、マチュ・ピチュ村と日本での友好都市になっている。

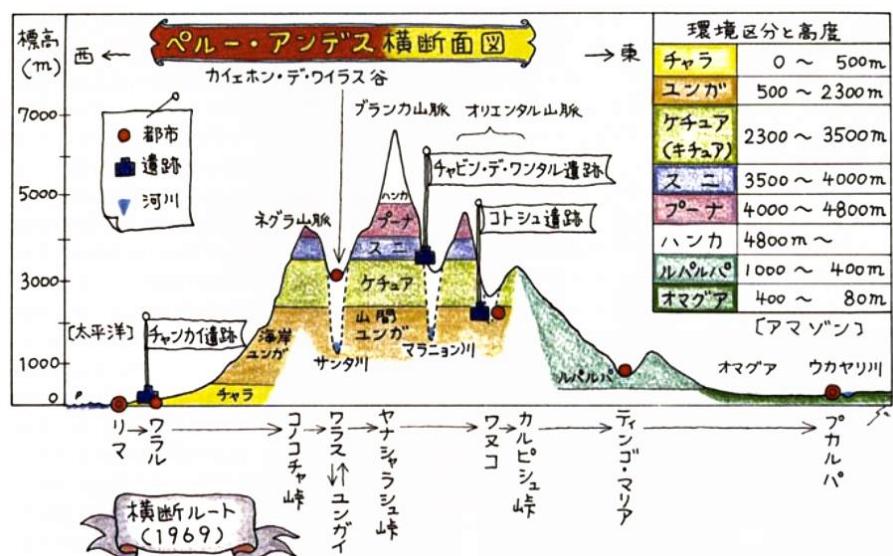
インカの農業のやり方に関しては、クスコ近くの標高3000mを超える「聖なる谷」にモライ遺跡がある。モライとはケチュア語で「丸く凹んだ場所」という意味。円形状のアンデスネス（段々畑）が広がっており、各段は人の背丈よりも高く、底部との差は約100mもあり、インカの

人々は底部と上部の温度差を利用して、作物栽培のテストをしていた農業試験場といわれる。

この谷の付近には、インカ帝国時代からのアンデスの塩田マラスもあり、いまでも手作業で塩の結晶を集めている。アンデスからの湧き水の塩分濃度は、海水の7倍、棚田状の池に引き込んで置くと3日で塩になる。マラス村は台地上にあり、この約4000の塩田の管理、農耕などの労働は、すべて伝統の「アイニ」（相互扶助）で村人同士が助け合って行う習慣があるのは、古き良き日本などと共通である。この村でも山岳信仰は見られ、アンデスの山の神に感謝し、塩水の源流に供物を捧げて祈る祭があるが、例によって、十字架などキリスト教のやり方が加わっているのは、アウサンガテ近くの氷河で行われる、規模の大きいコイリュリティの祭⁶⁾に似ている。

中南米縦断の話にもどると、リマでの久しぶりの休養を済ませた後、少し北に戻り、はるばるアンデス山脈を越え、ペルー・アマゾン上流のプカルパまで生物調査することになった。

その途中、めったに日本人が行かないペルー東北部の辺境の地、バグアで、ある日本人に会った。小さな村で、朝食をとる場所を探していた私たちは、他に無いので「パルレ・オリエンタル（東洋の真珠）」という名の、汚い食堂に入った。食



堂の主人は東洋人だったが、私たちは「どうせ中国人だろう」と思っていた。中国人は一般に、世界中どんな辺境でも移民定住し、主として食べ物の店を開き、堅実にその地に根づいている。

日本語で何を食べるか相談し、代表がスペイン語で注文する。私たちの何時のことだ。食事の終わり頃、主人が決心したように近づいて来た。

「アンタラ日本人ですか・・・」。「そうです。やはり貴方は・・・」日本人ですかという言葉をぐっと押さえた。彼は初めから日本人が来たことは、分かっていたに決まっている。すぐに日本人だと言い出せなかった、彼の気持ちがわかるような気がしたからだ。「私は熊本ですバイ」彼は、それからボソボソと話はじめた。バグアに来て42年、ほとんどバグアを出ていない。妻は中国人らしく日本語を全く話さない。「私はこのバグアに骨を埋めるつもりです」。こういう際、これはよく使われる表現だったが、彼は自分自身に無理矢理言い聞かせているようだった。

アンデスを越えアマゾン上流の港町、カルパへの道は大変だったが、蝶の収穫もあった。カルピッショ峠というアンデスの分水嶺のトンネルを抜けると、そこは熱帯だった。すぐ、緑深い峠道のあたりの上空を、きれいな大型の蝶が何匹も舞っているのに気づいた。南米のモルフォ蝶でも特に珍しい、高地性の真珠色に輝く、スルコフスキーモルフォだ。ことに私が採った、新鮮な雌の翅の色は、微妙に深い真珠色で、この世のものとは思えないほどの美しさだ。



写真3 ブカルパにようやく着いたランドクルーザー
向こうはまだ広いアマゾン河（1969年）

その後アマゾンに続く平らな道になると。行く手に積乱雲が発達し出した。やがて予想通り激しい大雨になり、ランドクルーザーの屋根上に張ったテントも雨を通し、シュラフなど皆ズブヌレになった。それでも地面に張るよりは遙かにマシだったと思う。少なくとも、有毒なヘビや虫からは逃れられたからである。大きなトラックが多数立ち往生しており、4輪駆動で脇をすり抜けようとしたが失敗、親切なトラックの運転手たちの計らいで、向こう側のトラックに引っ張ってもらって、ようやく脱出した。彼らとの会話の中で分かったのがペルー大衆の反米精神で、親日感情は思ったより強かった。

ようやく着いたカルパでは、大河アマゾンは3000km上流でも向こう岸がやっと見える位の川幅の広さ。いつものように中華料理屋に入る。足りなくなったペソを交換するためもある。中国人は銀行よりも手軽に換金してくれ、一般にレートも良い。久しぶりの中華料理をおいしく食べていると、「ヤー」と言って入って来たのは東京の探検部サロン⁷⁾で顔見知りの、上智大学探検部OBの重鎮、磯貝浩さんと松島駿二郎さんの二人。彼らは、なんと大西洋側の河口のペレムから、遠々とアマゾン河を船で遡り、2ヶ月もかけて、目的地の太平洋からの陸路の終点プラルパに着いたばかりらしい。磯貝氏は遡行途中、森林性梅毒に似た風土病に罹り、アマゾン現地の医者は応急手当をしてくれたが、日本に帰ると「こんな病気は診たこと無い」と言われ、治療に大変だったらしい。

リマに戻った後、インカのミイラを包んだ布の収集で有名だった泉先生の盟友天野考古博物館の天野芳太郎さんと飲みながら話す機会があった。前述のペルー奥地バグアで会った日系移民の話をすると、天野さんは、成功者だけを取材して出版されたらしい『ペルー移民史』はダメだと言い「君たちは一将功なって万骨枯るという言葉を知っているだろう、これが日本移民⁸⁾の実態だ」と、こう続けた。「昔ペルー移民の一部は、海岸地方の農奴的扱いに反抗して、あのアンデスの4000mの高い寒い峠を越え、ゴム景気を頼りにアマゾン上流に下って行った人もいたのだ。ロバの背にくくり付けられ、殆どの人は途中で、それこそ声も

たてずに死んで行ったのだよ、声もたてずに・・・」と言った時の、天野さんの常日頃の温顔が一転した厳しい表情は、50年後の今でも忘れない。

現代のペルー日系人の誇りは、何と言っても、この国の大統領を日系人から輩出したことであろう。アルベルト・フジモリ大統領（1990－2000年）は、在ペルー日本大使館にも出生届けを出しておらず、日本国籍も持っていたと言われる日系2世である。両親は熊本生まれの日本人で、日系人の良い特性として子どもの教育には熱心で、なるべく大学まで出す。学業優秀だった彼は、後に大学教授までなった。彼は、不評だったガルシア前大統領の遺したペルーのどん底経済を立て直し、日本からの援助も引き出し、始めは順調だったが、次第に独裁的になり悪評も出てきた。1996年にはトゥパク・アマル革命運動によるペルー大使公邸占拠事件が発生した。この事件は翌年、ペルー軍コマンド部隊が公邸に突入して解決したが、フジモリ大統領の勝手に見える振る舞いに対する批判が次第に高まっていた。その頃、アマゾン川下り中の早稲田大学探検部員2名が、ペルー国軍兵士に殺害される事件が発生した。アマゾン川流域の監視所に立ち寄らず、筏で通過した探検部の二人を、監視所の兵士が連行し殺害、現金等を強奪し、遺体を監視所付近に投棄し、犯人兵士が逮捕された。フジモリ大統領とは直接の関係はないが、日本の大学探検部が海外で起した、最悪の事件であろう。

その後、フジモリ大統領はブルネイで開かれたAPEC会議終了後、東京に事実上亡命した。日本政府は彼が日本国籍を持つので、滞在できるとした。後に彼は、チリに行くなど紆余曲折はあったが、ペルーに帰国した時、逮捕され有罪になり健康も崩した。長女のケイコは米国の一級大学出で、父の後を継ぐべく何回も大統領選に出馬したが、僅差で当選できなかった。

リマには、その後何回か、行く機会があった。私達は、中南米旅行の前に必須だったスペイン語会話の学習は、当時ペルー東海岸のワラルから農

学部に留学されていた福田アナさんに皆で習った。近年行った時には、アナさんは日系有力者と結婚してリマに住んでおられ、お礼に行ったところ、豪邸で歓迎された。芳太郎さんの死後、古代アンデス文明のチャンカイ文化の織物などで有名な天野博物館は、奥様によって護られ健在で、日本人などの観光コースになっている。

この時、ナスカの地上絵も見に行った。地上絵見物もすでにルーチン化しており、軽飛行機が次々に飛び立ち、砂漠の上を旋回し、ハチドリ、サル、クモなどの絵を見て回る。2020年にはネコの絵も見つかった。昔は何のための地上絵か疑問があったが、空から絵に見える地上の線は、どうやら雨乞いの儀式で人々が歩いた跡らしい。

今でこそ、マチュ・ピチュやナスカに行き、インカ文明の遺跡⁹⁾を巡る日本人観光客は少なくないが、昔のペルー僻地は研究者による学術調査の対象だった。中でも東大のアンデス学術調査団は、プレ・インカ遺跡を中心に研究を進めた。パイオニアだった泉靖一先生¹⁰⁾は、まずアンデス山中のワヌコ近くのコトシュ（小山の意）遺跡を発掘した。最下層のミト期（BC2500-1800年）の建築、ここに「交差した手の神殿」は、基壇の上に据えられた一辺約9メートルの正方形の部屋で、人間の両手を交差させた形の土製レリーフが、左右一対となって内部の壁面を飾っていた。アンデス文明形成期の土器群も見つかった。

その後、アンデス遺跡発掘は、弟子の大貫良夫さん¹¹⁾に学術調査が引き継がれ、1989年、ペルーのカハマルカ近郊にあるクントゥル・ワシ（Kuntur Wasi、コンドルの家の意）遺跡（BC1100～50年）が発掘され、南北アメリカ大陸最古の金の冠など、いくつかの黄金製品がでてきた。この遺跡はチャビン文化と関連がありBC1000～700年頃に建設されたらしい。そして、これらの出土品を守り研究成果を地元に還元するため、調査団は1994年にクントゥル・ワシ村に博物館を建設し、寄贈した。以降、博物館は地元住民インディヘナ¹²⁾の有志によって運営されている。その紆余曲折は、大貫良夫『アンデスの黄金—クントゥル・ワシの神殿発掘記』中公新書（2000）参照。

大貫さんと言えば、私たち縦断隊が中南米に行く前は、まだ若く文化人類学教室の助手で、アマゾン上流ティンゴ・マリアの町近くに「怪鳥のいる洞窟」がある、と教えてくれた。実際の原因には諸説あるが、大貫さんは、その洞窟に入った翌日、原因不明の高熱を出してしまい、直ぐリマに帰ったそうである。洞窟の現地名は「クエバ・デ・ラス・レチューサス」、直訳すれば「コウモリの沢山いる洞窟」で、私たち探検部員が見逃す手はない。しかし私たちは洞窟に入り多数いる怪鳥を捕まえようとしたが失敗、コウモリでなくアブラヨタカと後で分かった。もっとも昆虫の成果もあり、洞窟の底には怪鳥がジャングルから集めて来た樹の実の食べカスが堆積し、暗い中、ゴミムシダマシなどの昆虫やダニがゴソゴソ這い回っていた。勇気のある係の隊員が、虫のついた実ごとビニール袋に入れ捕まえ、これで生物学調査ができたはずである。

この遠征は生物調査の目的「古赤道説」の証拠を昆虫で得る点でも、成果があった。「昆虫でも古赤道型の分布をする」ことが知られていたクワガタに近い甲虫の珍種：チアソグナーチス類を、ボリビアのアンデス山地で採集できた。この甲虫は夕方活発に飛び回り、車のフロントガラスにガンガンぶつかったので、多数が採れ、採集地と月日が分かる他の膨大な数の昆虫標本（科学博物館に収納）とともに、いずれ何らかの役には立つのであろう。

また私自身にとっても、若い頃の初めての海外経験が、僻地を含む長期旅行だったので、40歳頃からの各国で「世界百名山」を眺める、大変な僻地が多い旅も、気安く要領良く計画し実行でき、ラッキーだったと言わなければならない。

しかし、もう一寸大きく全体論的なことを言うと（『中南米の光と影』の「探検の終末」でも書いたものだが）「1964年 の海外旅行の自由化以来、日本は多数の観光客に混じって意識的にしろ、無意識的にしろ、未知の土地へのあこがれを旗印に、日本から海外へ逃げ出す（“エクスペディション”をする）若者をつくってきた。帰途立ち寄ったロンドンの街角で、スイスのユースホステルで、カ

トマンズのラマ寺のそばで、私は多くのそのような若者を見た。とどのつまり彼らはストレンジャーとして外国に住み日本に帰って来ないか、日本に帰って「まともな生活」に自らをはめ込んで行くか、二者択一を迫られているようだった。東へ向かって離陸した羽田に、私は西からもどってきた。地球を回り回っても、やはり私は日本に帰ってきてしまったのである。二者択一でない第三の道（日本国内を変革する“インペディイション”を試みる）は厳しく、険しく、有りそうもないほどなのに・・・。

この中南米の旅行中、プカルバで遭遇した、上智大に探検部を創った磯貝浩さん¹³⁾は、私と会った頃は東京四谷のマンションで探検部創設者などが参加したサロンなどを開いていた。その後、相棒の松島駿二郎さんなどと創作集団「グループ・パアメ」を結成し、80年代には信州柏原の田舎に引っ越し「ん亭」を建てた。自称「虚業」を東京でしていた反省か、後になって農薬の慢性神経毒性が科学的に明らかになる前に、先駆的に無農薬農業¹⁴⁾も始めた。宅配便で発送はしたが、当時は無農薬野菜は藤本敏夫・加藤登紀子夫妻が房総で始めた「大地を守る会」などが有名人を動員して何とかやっていた位で、一般には理解がなく需要もまだ少なく、残念ながら彼のこのパイオニア的実業は挫折した。趣味の？パチンコなどで地元の人々と交流していたが、火災などの不幸もあり、2008年、磯貝さんは急死されてしまった。

チベットのツアンポー渓谷などを最後の例外として、探検の本来の目的であった地理学上の未知な土地（テラ・インコグニータ）は無くなってしまった。しかし21世紀の地球でも、ソマリアなど政治、社会、風俗学的に未知な（ことに観光好きな日本人には未知な）地方／国は沢山ある。もちろん、危険な探検などせずとも、医学を含む自然科学研究を人生の職業に選べば、未知なこと、研究することは、まだまだ無限にある。

今の時代の“探検部出身”的作家たちの行動を見て、今ではあの世にいる磯貝さんなど大学探検部のパイオニアの人たちは、どう思うのであろうか。

ペルーのインカ遺跡の名山 ウイナ・ピチュにも登れた この中南米縦断調査の旅、その準備や過程で散々お世話になった泉さんに、やはりあの世にいる深田さんや天野さんなどと共に、合掌。

注

1) M.Adams 『マチュピチュ探検記』 森夏樹訳、青土社 (2013) 訳者あとがき、参照

2) 古赤道説は、前川文夫先生（東大植物学教授、1908- 1984）が提唱した植物分布型のひとつである。生物分布にはさまざまな型があるが、普通はある程度隣接した地域にまたがって、ある程度まとまった区域になる型が多い。しかし中には、世界ではるかに離れた地域に同じ生物が分布する変な場合もあり、隔離分布と言う。最も有名なのが植物のドクウツギで、この隔離分布の原因を、先生が「地磁気観測から分かった、古い時代の赤道の位置」と結びつけたものである。

3) 東大的学術調査探検部では、学術調査には根本的になじまないアルピニズム的な登山や岩登りは、公認されていなかった。創部数年後、この禁を破り個人的に谷川岳の岩登りをやった部員が墜死してしまった。死んだ彼は探検部の部員以外、所属山岳団体は無く、仕方なくマネージャーだった私の決断で、深夜の東京から遺体収容に向かった。真夏の翌日だったので、既に腐敗が進んでおり、ひどい死臭、自慢の息子の変わり果てた姿に、傍目も気にせず号泣する老文芸評論家、遭難の原因を相手のせいと非難し合う遺族などなど、その酷い体験から、その後私たちは、登頂至上主義の、アルピニズム的登山を一切やらなくなってしまった（『私の世界百名山』27 ラ・メージュの注7に詳しい）。

4) 热帯雨林の樹冠の昆虫の豊富さについては、湯本貴和『热帯雨林』岩波新書（1999）や「私の世界百名山、56、クリンチ篇」の本文と注8も参照。日本の北の方の山々でも、雪渓や雪の上に吹き上げられ飛べなくなった小さな昆虫がいることが多い。

5) エルンネスト・チェ・ゲバラ（1928-1967）は、医学部在学中の 1951 年、友人のグラナードとともに、オートバイでアルゼンチンから南米各国を北上する放浪旅行を経験した。18 年後の私たちの南米縦断旅行とは、方向は反対だが、ほぼ同じものを見ていると思われる。この旅の過程で、ボリビアやチリの最下層の鉱山労働者やペルーのハンセン病患者らとの出会いなど、当時比較的裕福であったアルゼンチン以外の、南米各地の貧しい状

況を見聞したりするうちに、マルクス主義に共感を示すようになった。後にキューバ革命に参加した動機である。このことは著作『モーターサイクル南米旅行日記』に記され、後にこれを原作として、映画『モーターサイクル・ダイアリーズ』も制作された。このオートバイを、スペインの作家セルバンテスの小説『ドン・キホーテ』の主人公が乗る馬の名にちなんで、ロシナンテと命名したという。本当の革命はドン・キホーテ的と自嘲していたのかも知れない。それでも強国米国相手に闘ったキューバ革命は実現したのである。

6) この祭の時に合わせ私も行き、呪術師のまじないなどにも参加した『私の世界百名山 57、アウサンガテ』参照。なお現地に詳しいガイドの話では、昔、数人のインカの人々が、教会の前ではなく、とある岩陰で彼らの踊りをしていたそうで、反キリストの抵抗はまだ残っているのかも知れない。

7) サロンは、四谷駅近くのマンションで開かれ、上智、早稲田、法政、東大など、東京の大学探検部の創始メンバーなどが懇親や情報交換に集まっていた。海外登山が珍しかった頃で、東京女子医大の今井通子さんや、植村直己さんも居たと言う話がある。植村さんについては『私の世界百名山』35、デナリ、注8に詳しい。

8) 初期の日系移民（ブラジル移民が典型）は、石川達三の第1回芥川賞受賞作『蒼氓』で、はっきりと書かれているように、その状況は日本からの“棄民”と言って良いほど酷かった。

9) ペルーでは今まで、各地で遺跡の発見、調査が続々進行しており、私たちが訪れた頃より遙かに良くインカやそれ以前の文明の実態が分かって来た。

私たちはリマに急ぐため立ち寄らなかったが、北海岸部のカラル遺跡では、プレ・インカ時代（紀元前 3000 年頃）から人が集団で定住し小国家をつくり、中心の大神殿は何回もより大きく重ねて建替えられていた。カラル地方の特長は、武器など戦いを想定したもの、あるいは戦いで損壊したと思われる人骨といった争いの痕跡が一切見つかっていないことだ。その一方で、祭礼の中心地と推測されている円形広場跡などからは、コンドルなどの骨でできた人面線刻のある笛や、リヤマの骨でできたコルネットが発見されている。つまり、これらの発見物（この時代のカラルの人々が作っていた物）は、交易が盛んで歓楽もある穏やかな平和な社会で役立つものばかりだったことを示唆している。このカラルでの平和国家の存在は、後のこの地方に灌漑水路を守るために軍事を重視したモチエ国家や、その後、中部アヤクチョ近く

にできた、軍事帝国とさえ表現されるワリ帝国と対称的である。

10) 泉靖一先生（1915-1971）は、石田英一郎先生と共に、東大に文化人類学教室を創った人。元東大東洋文化研究所所長。東京に生まれるが、ソウル（当時京城と呼ばれる）に移り、京城帝国大で山岳部を創立。戦後、満州朝鮮から苦労を重ねて帰国した婦女の堕胎などの救済に博多で尽力した。のち明大助教授から東大教授になり、60年代には万博がらみで決まった国立民族学博物館の創立に、梅澤忠夫先生と共に活躍、初代館長になる直前、クモ膜下出血で急死。リマの天野博物館の天野芳太郎さん（1898-1982）と共に、『私の世界百名山』23、ワスカラン、参照。もっと詳しくは、藤本英夫：『泉靖一伝—アンデスから済州島へ』平凡社（1994）。

中米縦断時、隊長泉先生の「枕に頭が付くや寝付き、あとは大イビキ、朝とでも早く起き仕事をする」という性質から、他の隊員に同室を敬遠され、途中からホテルは、同様な性質をもつ私が同室と、自然に決まった。夕方は「黒田君、飲みに行こう」とよく誘ってくれた。私が卒業した農芸化学科では、勉強よりも、「酒の博士」坂口謹一郎先生直伝の酒の飲み方を教えて貰ったのが幸いした。飲み屋では、探検のこと、文化人類学関係、特に古い岩絵の重要さなど、いろいろ教えてもらったのが、後の人生ことに『私の世界百名山』巡り、各種原稿書きなどに役に立った。

11) 大貫良夫さんは、学生時代はスキー山岳部、日本山岳会会員、最後の秩父宮賞を同じ山岳部OBの春田俊郎先生と共に受賞。和田リーダーと元ペルーで一緒だったせいか、私たち探検部の中南米隊には、ペルーのことなどを、事前にいろいろ教えてくれた。大貫さんのフクロウの洞窟での発熱は、「リマにいた恋人会いたさだったため」などの説がある。報告書『中南米の光と影』（洞穴の鳥は、フクロウではなくアブラヨタカ）を参照。泉先生の直弟子で、後に教授職を継いだ。なお、春田さんは私の高校生物部の顧問だった。生物部OB会の春田先生の受賞祝賀会で「今、世界百名山をやっています」と報告すると、「それなら日本山岳会に入れ、紹介する」と言われた。しかし、その数ヶ月後、春田さんは、ヒマラヤの高山蛾調査の出発直前、急死。私はそれを遺言と思って、日本山岳会に入会した。

12) 昔使われたインディオは、ラテン・アメリカに住む先住民族を指す言葉で、1960年代から、これには差別的ニュアンスが含まれていると判断され、インディヘナという語が用いられるようになった。インディヘナは外

来の白色系の人間の対極をなし、その中間に各種のメスティソ（混血）がいる。

13) 上智大の磯貝浩さんは松島駿二郎さんと組み、早くからヨーロッパをヒッチハイクで回る無銭旅行などをやり、今ではルポライターと呼ばれる、フリーも可能な職／仕事でもバイオニアだった。また現在まで盛んになった脱都会＝田舎暮らしでも先駆者の一人である。しかし信州の丸太小屋に書き溜めてあった原稿や資料が火事でほとんどが焼けてしまった不幸があり、パチンコ三昧など村の実情を書いた『わがいとしの田園777フレンドたちよ！』などの軽い著書しか残っていない。

他方、日本初の京大探検部を創った本当のバイオニア、本多勝一さんは朝日新聞のスター記者になり、定評のある『日本語の作文技術』や「南京大虐殺」関係など激しい議論的になったほどの重要な本を含め、『ニューギニア高地人』など巾広いテーマの膨大な数の本を残している。磯貝さんや松島さんは、もう亡くなってしまったが、本多さんも強調していたが、本を書いたりして記録を残すこととは、大学探検部、いや旅行／探検をやる者の、探検の英国での発祥以来の鉄則である。

14) 無農薬農業は、イタリアの小村発祥の Slow Food 運動（有機農業で地産地消）の欧米での高まりの影響もあり、日本でも現在盛んになりつつある。農薬を控える「コウノトリを育む農法」に変えた兵庫県豊岡市、「トキの無精卵の原因が、ネオニコチノイド農薬である」という神戸大の星信彦教授の指導で、佐渡市が協力しトキが繁殖をした。とくに学校給食に近隣の無農薬農産品を使う運動は、地産地消にもなり、市民運動が盛んになっただけでなく、農水省までが推進を唱うようになった。ネオニコチノイド農薬など農薬類の慢性毒性は、発達障害やアトピーの原因であり、米国小児科学会が公式に危険性を訴える公式声明を出したのは、2012年のことである。詳しくは、拙著『発達障害の原因と発症メカニズム—脳神経科学の視点から』 河出書房新社（2014、改定重版2020）、『科学』岩波書店87(4)、388（2017）など参照。なお後者の論文は、環境脳神経科学情報センターのHPから読める。